

すいかずら

平成八年四月二十六日発行
編集 杜寺建造物美術協議会
発行 杜寺建造物美術協議会
〒108 東京都港区高輪一―五―二十二
(株)小西美術工芸社内
TEL (〇三) 三四四七―一四八一
FAX (〇三) 三四四七―〇七三六

文化財保護法の改正へ

―新しい制度を導入 近代建造物に重点を置き―

（平成八年三月二十五日刊
「神社新報社」より承認を得て転載）

「文化庁では二十年ぶりに文化財保護法の改正案を今国会に提出した。法案では文化財保護の多様化を図るため、あらたに文化財登録制度を導入するほか、文化財保護法上での市町村の教育委員会が果たす役割を重視、文化財保存、活用に関し市町村の教育委員会が国に意見を具申する権利の明確化をはかるとともに、重要文化財等の公開手続きの緩和も盛り込んでいる。中でも登録制度では、多様で大量な近代の文化財を、まづ建造物から登録、都市開発等による消滅の危機から保護しようとしてある。登録文化財となる

と、固定資産税や地価税が軽減されるほか、歴史的建造物活用や整備事業に対する低利融資も実施される。」
（以上原文のまま）
以下同紙の記事を編集子なりに要約させて貰うと次の様なこととなります。
従来の文化財保護法は基本的な法の条文で、文化財を護るという大前提が本旨で大切な事ではある訳ですが、やはり多年のさまざまな事例や経緯が示すように、もっと幅広く多面的な観点から、文化財を活かして行く方向づけの一端として取り上げたという印象が強いと思います。即ち登

録制度は、指定制度に比べ規制を緩和して対応をし易いものにし、所有者の負担をも種々軽くしてあげて文化財を活用しながら保存出来る道をつけるものということになります。現在全国の約二万五千件の建造物の対象から、日本建築学会や土木学会、文化庁の近代和風建築・近代化遺産調査をもとに実態を把握して、二千五百件に絞り込み登録文化財とする準備を進める予定だということです。神社関係では「明治神宮宝物殿」や「近江神宮社殿」などが登録文化財の候補にあがっているそうです。
文部大臣が「登録基準」を設け、各教育委員会から意見を聞き、文化財保護審議委員会にはかったのち文化財登録原簿に登録し、登録後は所有者に対し登録を通知し、登録証を交付し告示する、とのこ

とです。又、登録については地方公共団体から推薦があれば、指定文化財の場合とは異なり比較的容易に登録を受けることが可能となる、とあります。現行の指定制度では、建物の内・外部共の現状変更については、文化庁長官の許可が必要のため、ほぼ禁止に近い状況なのですが、登録制度ではこれが届出制となります。即ち、外部を大きく変更する場合に届けて、文化庁が指導、助言、勧告等を行うということになります。つまり、今までの修理工事等で現状を変更したい状況になった場合、担当技師や業者が頭を抱えるケースもどうやら解消される事になります。
現在、建造物の場合、文化財の指定を受けると、家屋・土地とも固定資産税、地価税が非課税の優遇措置がとられています。登録制度となり、登録された文化財の固定資産税のうち家屋部分の税額が半額以内に軽減される支援措置のほか、地価税も半額に減免される。建造物の修理などの整備にあたっては指定文化財同様、日本開発銀行、北海道東北開発公庫などから

低金利で融資を受けることが出来る。とかの利点もある様です。

これらの改正を是とし大いに歓迎するものです。私共の様な修理部門を担当させて頂く業者にとって、近世社寺・近代建築の文化財保護対策が打ち出される事は、前途に光明を見る思いがいたします。私共からは間接的な表現しか出来ませんが、文化庁及び関係部門の皆様方の御盡力に深甚なる感謝を捧げるものでございます。

当第二号の編集方針として 彩色特集を組みました

当協議会には三部門ございまして、今回はそのトップをきって「彩色特集」号として盛り沢山に編集いたしました。時宜を得た中級技術研修の様子や部会長を中心にした鼎談会や材料店紹介等を入れさせて頂き、面白く読んで頂ける内容になった心算ですが如何でしょうか。

『彩色技術・中級研修』

(取材記事)

去る二月十九日から三月十一日から各六日間づつ、(財)日光社寺文化財保存会で、文化庁のご指導のもとに「選定保存技術(彩色)」の活動の一端として建造物の彩色従事者への中級研修が、指定の業者から十名を集め行われました。これは近年同会で催されてきた初級研修に次ぐもので、今回は特に関西から二業者の社員が参加されており、即ち内訳は全部当協議会のメンバーで、研修生名簿から出席者を列記しますと、岸野美術漆工業(株)から岸野直資・鈴木宗幸、(財)川面美術研究所から清水範子・井上利美、(有)さわの道玄から久安敬三・小野村勇人、(有)齋藤漆工芸からは森田豊、(株)小西美術工芸社からは石河剛・佐藤圭寿・佐藤亜矢子でした。

第一週の第一日、冒頭で保存会次長の当番長職・日光東照宮鈴木権宮司から挨拶があり研修がスタートしました。

第一週の内容は、冒頭で保存会次長の当番長職・日光東照宮鈴木権宮司から挨拶があり研修がスタートしました。

第二週に入り初日に、(財)文化財建造物保存技術協会から安田一男管理課長が来所されました。同氏が講義された内容は、(財)文化財建造物保存技術協会(以下文建協と略します)の生い立ちと変遷、文建協の具体的な組織、系統立った修理が出来る様になった過程

程への説明、たゆまない前進という意欲で全体が進んでいると表明されました。

今回、研修全行程最終日の前日の三月十五日に文化庁建造物課江面嗣人文化財調査官が来見されました。彩色選定保存技術保持団体理事長稲葉久雄日光東照宮宮司に会われた後、保存会に来られ研修棟で全員に講義されました。日本の文化遺産保存の歴史と制度(建造物の場合)という表題で基調講義を頂きました。

- ①文化財保護の根拠
- ②文化財保護の対象
- ③国宝・重要文化財建造物の種類別指定数(平成六年七月現在)
- ④重要文化財等に関する規制と援助等
- ⑤修理等
- ⑥修理のための予算
- ⑦文化財保護に係わる現行税制(建造物)
- ⑧復原的修理
- ⑨修理報告書

ご発言だったと思います。皆さんが習得されているものは伝統技術の価値から言うところには高いものであり、常に絶えまない努力をして下さい。高度の精神性で裏付けられて行けば、技術的なことはかなりではないと言ったことが把握出来るのではないかと思います。「文化財の保存と活用」については、例えば一つの修理の過程を修理中には見せないのが従来の考え方でしたが、民意を的確につかまえて行く時代になって来ており、国家予算をきめる人達や世間一般の人達にも理解と親しみと協力を仰げる様な努力をして行かなければならないし、そのためには修理や復元の状況を危険防止について考え乍ら公開する事も大切な方法だと思



彩色研修(中級)時間割表

(講):講義、(実):実技、(見):見学

月日	時間	内容
2月19日(月)	9:00	開講式(講) 建造物彩色
2月20日(火)	10:00	線描揚げ写し模写技法
2月21日(水)	11:00	彩色見取り図臨写技法
2月22日(木)	12:00	彩色見取り図臨写技法
2月23日(金)	13:00	彩色見取り図臨写技法
2月24日(土)	14:00	彩色見取り図臨写技法
2月25日(日)	15:00	彩色見取り図臨写技法
2月26日(月)	16:00	彩色見取り図臨写技法
2月27日(火)	17:00	彩色見取り図臨写技法
2月28日(水)	18:00	彩色見取り図臨写技法
2月29日(木)	19:00	彩色見取り図臨写技法
2月30日(金)	20:00	彩色見取り図臨写技法
2月31日(土)	21:00	彩色見取り図臨写技法
2月32日(日)	22:00	彩色見取り図臨写技法
2月33日(月)	23:00	彩色見取り図臨写技法
2月34日(火)	24:00	彩色見取り図臨写技法
2月35日(水)	25:00	彩色見取り図臨写技法
2月36日(木)	26:00	彩色見取り図臨写技法
2月37日(金)	27:00	彩色見取り図臨写技法
2月38日(土)	28:00	彩色見取り図臨写技法
2月39日(日)	29:00	彩色見取り図臨写技法
2月40日(月)	30:00	彩色見取り図臨写技法
2月41日(火)	31:00	彩色見取り図臨写技法
2月42日(水)	32:00	彩色見取り図臨写技法
2月43日(木)	33:00	彩色見取り図臨写技法
2月44日(金)	34:00	彩色見取り図臨写技法
2月45日(土)	35:00	彩色見取り図臨写技法
2月46日(日)	36:00	彩色見取り図臨写技法
2月47日(月)	37:00	彩色見取り図臨写技法
2月48日(火)	38:00	彩色見取り図臨写技法
2月49日(水)	39:00	彩色見取り図臨写技法
2月50日(木)	40:00	彩色見取り図臨写技法
2月51日(金)	41:00	彩色見取り図臨写技法
2月52日(土)	42:00	彩色見取り図臨写技法
2月53日(日)	43:00	彩色見取り図臨写技法
2月54日(月)	44:00	彩色見取り図臨写技法
2月55日(火)	45:00	彩色見取り図臨写技法
2月56日(水)	46:00	彩色見取り図臨写技法
2月57日(木)	47:00	彩色見取り図臨写技法
2月58日(金)	48:00	彩色見取り図臨写技法
2月59日(土)	49:00	彩色見取り図臨写技法
2月60日(日)	50:00	彩色見取り図臨写技法
2月61日(月)	51:00	彩色見取り図臨写技法
2月62日(火)	52:00	彩色見取り図臨写技法
2月63日(水)	53:00	彩色見取り図臨写技法
2月64日(木)	54:00	彩色見取り図臨写技法
2月65日(金)	55:00	彩色見取り図臨写技法
2月66日(土)	56:00	彩色見取り図臨写技法
2月67日(日)	57:00	彩色見取り図臨写技法
2月68日(月)	58:00	彩色見取り図臨写技法
2月69日(火)	59:00	彩色見取り図臨写技法
2月70日(水)	60:00	彩色見取り図臨写技法
2月71日(木)	61:00	彩色見取り図臨写技法
2月72日(金)	62:00	彩色見取り図臨写技法
2月73日(土)	63:00	彩色見取り図臨写技法
2月74日(日)	64:00	彩色見取り図臨写技法
2月75日(月)	65:00	彩色見取り図臨写技法
2月76日(火)	66:00	彩色見取り図臨写技法
2月77日(水)	67:00	彩色見取り図臨写技法
2月78日(木)	68:00	彩色見取り図臨写技法
2月79日(金)	69:00	彩色見取り図臨写技法
2月80日(土)	70:00	彩色見取り図臨写技法
2月81日(日)	71:00	彩色見取り図臨写技法
2月82日(月)	72:00	彩色見取り図臨写技法
2月83日(火)	73:00	彩色見取り図臨写技法
2月84日(水)	74:00	彩色見取り図臨写技法
2月85日(木)	75:00	彩色見取り図臨写技法
2月86日(金)	76:00	彩色見取り図臨写技法
2月87日(土)	77:00	彩色見取り図臨写技法
2月88日(日)	78:00	彩色見取り図臨写技法
2月89日(月)	79:00	彩色見取り図臨写技法
2月90日(火)	80:00	彩色見取り図臨写技法
2月91日(水)	81:00	彩色見取り図臨写技法
2月92日(木)	82:00	彩色見取り図臨写技法
2月93日(金)	83:00	彩色見取り図臨写技法
2月94日(土)	84:00	彩色見取り図臨写技法
2月95日(日)	85:00	彩色見取り図臨写技法
2月96日(月)	86:00	彩色見取り図臨写技法
2月97日(火)	87:00	彩色見取り図臨写技法
2月98日(水)	88:00	彩色見取り図臨写技法
2月99日(木)	89:00	彩色見取り図臨写技法
2月100日(金)	90:00	彩色見取り図臨写技法
2月101日(土)	91:00	彩色見取り図臨写技法
2月102日(日)	92:00	彩色見取り図臨写技法
2月103日(月)	93:00	彩色見取り図臨写技法
2月104日(火)	94:00	彩色見取り図臨写技法
2月105日(水)	95:00	彩色見取り図臨写技法
2月106日(木)	96:00	彩色見取り図臨写技法
2月107日(金)	97:00	彩色見取り図臨写技法
2月108日(土)	98:00	彩色見取り図臨写技法
2月109日(日)	99:00	彩色見取り図臨写技法
2月110日(月)	100:00	彩色見取り図臨写技法
2月111日(火)	101:00	彩色見取り図臨写技法
2月112日(水)	102:00	彩色見取り図臨写技法
2月113日(木)	103:00	彩色見取り図臨写技法
2月114日(金)	104:00	彩色見取り図臨写技法
2月115日(土)	105:00	彩色見取り図臨写技法
2月116日(日)	106:00	彩色見取り図臨写技法
2月117日(月)	107:00	彩色見取り図臨写技法
2月118日(火)	108:00	彩色見取り図臨写技法
2月119日(水)	109:00	彩色見取り図臨写技法
2月120日(木)	110:00	彩色見取り図臨写技法
2月121日(金)	111:00	彩色見取り図臨写技法
2月122日(土)	112:00	彩色見取り図臨写技法
2月123日(日)	113:00	彩色見取り図臨写技法
2月124日(月)	114:00	彩色見取り図臨写技法
2月125日(火)	115:00	彩色見取り図臨写技法
2月126日(水)	116:00	彩色見取り図臨写技法
2月127日(木)	117:00	彩色見取り図臨写技法
2月128日(金)	118:00	彩色見取り図臨写技法
2月129日(土)	119:00	彩色見取り図臨写技法
2月130日(日)	120:00	彩色見取り図臨写技法
2月131日(月)	121:00	彩色見取り図臨写技法
2月132日(火)	122:00	彩色見取り図臨写技法
2月133日(水)	123:00	彩色見取り図臨写技法
2月134日(木)	124:00	彩色見取り図臨写技法
2月135日(金)	125:00	彩色見取り図臨写技法
2月136日(土)	126:00	彩色見取り図臨写技法
2月137日(日)	127:00	彩色見取り図臨写技法
2月138日(月)	128:00	彩色見取り図臨写技法
2月139日(火)	129:00	彩色見取り図臨写技法
2月140日(水)	130:00	彩色見取り図臨写技法
2月141日(木)	131:00	彩色見取り図臨写技法
2月142日(金)	132:00	彩色見取り図臨写技法
2月143日(土)	133:00	彩色見取り図臨写技法
2月144日(日)	134:00	彩色見取り図臨写技法
2月145日(月)	135:00	彩色見取り図臨写技法
2月146日(火)	136:00	彩色見取り図臨写技法
2月147日(水)	137:00	彩色見取り図臨写技法
2月148日(木)	138:00	彩色見取り図臨写技法
2月149日(金)	139:00	彩色見取り図臨写技法
2月150日(土)	140:00	彩色見取り図臨写技法
2月151日(日)	141:00	彩色見取り図臨写技法
2月152日(月)	142:00	彩色見取り図臨写技法
2月153日(火)	143:00	彩色見取り図臨写技法
2月154日(水)	144:00	彩色見取り図臨写技法
2月155日(木)	145:00	彩色見取り図臨写技法
2月156日(金)	146:00	彩色見取り図臨写技法
2月157日(土)	147:00	彩色見取り図臨写技法
2月158日(日)	148:00	彩色見取り図臨写技法
2月159日(月)	149:00	彩色見取り図臨写技法
2月160日(火)	150:00	彩色見取り図臨写技法
2月161日(水)	151:00	彩色見取り図臨写技法
2月162日(木)	152:00	彩色見取り図臨写技法
2月163日(金)	153:00	彩色見取り図臨写技法
2月164日(土)	154:00	彩色見取り図臨写技法
2月165日(日)	155:00	彩色見取り図臨写技法
2月166日(月)	156:00	彩色見取り図臨写技法
2月167日(火)	157:00	彩色見取り図臨写技法
2月168日(水)	158:00	彩色見取り図臨写技法
2月169日(木)	159:00	彩色見取り図臨写技法
2月170日(金)	160:00	彩色見取り図臨写技法
2月171日(土)	161:00	彩色見取り図臨写技法
2月172日(日)	162:00	彩色見取り図臨写技法
2月173日(月)	163:00	彩色見取り図臨写技法
2月174日(火)	164:00	彩色見取り図臨写技法
2月175日(水)	165:00	彩色見取り図臨写技法
2月176日(木)	166:00	彩色見取り図臨写技法
2月177日(金)	167:00	彩色見取り図臨写技法
2月178日(土)	168:00	彩色見取り図臨写技法
2月179日(日)	169:00	彩色見取り図臨写技法
2月180日(月)	170:00	彩色見取り図臨写技法
2月181日(火)	171:00	彩色見取り図臨写技法
2月182日(水)	172:00	彩色見取り図臨写技法
2月183日(木)	173:00	彩色見取り図臨写技法
2月184日(金)	174:00	彩色見取り図臨写技法
2月185日(土)	175:00	彩色見取り図臨写技法
2月186日(日)	176:00	彩色見取り図臨写技法
2月187日(月)	177:00	彩色見取り図臨写技法
2月188日(火)	178:00	彩色見取り図臨写技法
2月189日(水)	179:00	彩色見取り図臨写技法
2月190日(木)	180:00	彩色見取り図臨写技法
2月191日(金)	181:00	彩色見取り図臨写技法
2月192日(土)	182:00	彩色見取り図臨写技法
2月193日(日)	183:00	彩色見取り図臨写技法
2月194日(月)	184:00	彩色見取り図臨写技法
2月195日(火)	185:00	彩色見取り図臨写技法
2月196日(水)	186:00	彩色見取り図臨写技法
2月197日(木)	187:00	彩色見取り図臨写技法
2月198日(金)	188:00	彩色見取り図臨写技法
2月199日(土)	189:00	彩色見取り図臨写技法
2月200日(日)	190:00	彩色見取り図臨写技法
2月201日(月)	191:00	彩色見取り図臨写技法
2月202日(火)	192:00	彩色見取り図臨写技法
2月203日(水)	193:00	彩色見取り図臨写技法
2月204日(木)	194:00	彩色見取り図臨写技法
2月205日(金)	195:00	彩色見取り図臨写技法
2月206日(土)	196:00	彩色見取り図臨写技法
2月207日(日)	197:00	彩色見取り図臨写技法
2月208日(月)	198:00	彩色見取り図臨写技法
2月209日(火)	199:00	彩色見取り図臨写技法
2月210日(水)	200:00	彩色見取り図臨写技法
2月211日(木)	201:00	彩色見取り図臨写技法
2月212日(金)	202:00	彩色見取り図臨写技法
2月213日(土)	203:00	彩色見取り図臨写技法
2月214日(日)	204:00	彩色見取り図臨写技法
2月215日(月)	205:00	彩色見取り図臨写技法
2月216日(火)	206:00	彩色見取り図臨写技法
2月217日(水)	207:00	彩色見取り図臨写技法
2月218日(木)	208:00	彩色見取り図臨写技法
2月219日(金)	209:00	彩色見取り図臨写技法
2月220日(土)	210:00	彩色見取り図臨写技法
2月221日(日)	211:00	彩色見取り図臨写技法
2月222日(月)	212:00	彩色見取り図臨写技法
2月223日(火)	213:00	彩色見取り図臨写技法
2月224日(水)	214:00	彩色見取り図臨写技法
2月225日(木)	215:00	彩色見取り図臨写技法
2月226日(金)	216:00	彩色見取り図臨写技法
2月227日(土)	217:00	彩色見取り図臨写技法
2月228日(日)	218:00	彩色見取り図臨写技法
2月229日(月)	219:00	彩色見取り図臨写技法
2月230日(火)	220:00	彩色見取り図臨写技法
2月231日(水)	221:00	彩色見取り図臨写技法
2月232日(木)	222:00	彩色見取り図臨写技法
2月233日(金)	223:00	彩色見取り図臨写技法
2月234日(土)	224:00	彩色見取り図臨写技法
2月235日(日)	225:00	彩色見取り図臨写技法
2月236日(月)	226:00	彩色見取り図臨写技法
2月237日(火)	227:00	彩色見取り図臨写技法
2月238日(水)	228:00	彩色見取り図臨写技法
2月239日(木)	229:00	彩色見取り図臨写技法
2月240日(金)	230:00	彩色見取り図臨写技法
2月241日(土)	231:00	彩色見取り図臨写技法
2月242日(日)	232:00	彩色見取り図臨写技法
2月243日(月)	233:00	彩色見取り図臨写技法
2月244日(火)	234:00	彩色見取り図臨写技法
2月245日(水)	235:00	彩色見取り図臨写技法
2月246日(木)	236:00	彩色見取り図臨写技法
2月247日(金)	237:00	彩色見取り図臨写技法
2月248日(土)	238:00	彩色見取り図臨写技法
2月249日(日)	239:00	彩色見取り図臨写技法
2月250日(月)	240:00	彩色見取り図臨写技法
2月251日(火)	241:00	彩色見取り図臨写技法
2月252日(水)	242:00	彩色見取り図臨写技法
2月253日(木)	243:00	彩色見取り図臨写技法
2月254日(金)	244:00	彩色見取り図臨写技法
2月255日(土)	245:00	彩色見取り図臨写技法
2月256日(日)	246:00	彩色見取り図臨写技法
2月257日(月)	247:00	彩色見取り図臨写技法
2月258日(火)	248:00	彩色見取り図臨写技法
2月259日(水)	249:00	彩色見取り図臨写技法
2月260日(木)	250:00	彩色見取り図臨写技法
2月261日(金)	251:00	彩色見取り図臨写技法
2月262日(土)	252:00	彩色見取り図臨写技法
2月263日(日)	253:00	彩色見取り図臨写技法
2月264日(月)	254:00	

す。国でも日本ばかりでなく韓国や中国からどう来てるか。幅を広げまして時代の隣近所国の隣近所も良う見よと、又、お宮さんがあつたらそのお宮さんの隣近所も良う見よと言います。一連の絵を描くグループが通っているか、山城なら山城、その隣近所をと、これは判り易いことです。

小西——関東の方には文様や絵様などをフリーハンドで描いているのが少ないんです。大体桃山期の特徴だと思ふんですが、江戸期へ来るとフリーハンドの手が無くなって、型を置いて型の通りに描いて行く、これが江戸の一つの特徴だと言えそうなんです。文化庁や文建協の先生方が仰る所謂手作りの仕事らしい味がなくなってしまうんです。ですからフリーハンドの面白さというものがあ

ると思ふんですが、これは関東では全然無いことは無いんですが、むしろ地方へ行くと残っているんです。非常に初歩的な絵の描き方になってい

たりします。これが本当の手作りではないかという考え方もあると思ふんですが、それに対して型を使って彩色をする仕事はやはり関西がそのルーツは古いと考えますが、その辺は後藤先生如何ですか。

後藤——私は彩色が型にはめられてしまうと厚みがなくなる様に思います。フリーハンドで描いているのは近くで見ると「ナンダこの線は」と言うのが離れて見ると仲々良いんです。京都の場合の彩色というのは平等院あたりからずっと色々ありますからね。

川面——はつきりとは判りませんでしたが、型を使っている可能性はありました。時代的にね。私は教えるという立場になってみると、へたがフリーハンドでやって貰うたから見られへんでしょう。そこから初歩的な人にはきっちり型でやれと、一方筆力のある、デッサン力のある、じょうての人やったらフリーハンドでやって貰ってもえ、ということ

とです。誰でもがフリーハンドでやれという見られんものになりすさかいにね。

後藤——だけどね、あまり上手な人がやると味がなくなるんじゃないですか。描くものというのはそれほど神経質じゃないんじゃないかな、逆に。川面——今に残っているものを見ていくと、上の手の人のものが残っているんでね。へたな人のやったものは段々と無くなって、いいものが残っています。型を使うというのは光琳さんのあのかきつばた、ね。MOAか、あそここのあ。

小西——熱海にあるMOA美術館ですね。川面——そうです。あのかきつばた、ね。あれでもね。同じパターンを型でやっているんですわ、ほかで。そやから光琳工房的なもの型を使っているんです。光琳さん自身でなくて工房では型を使っている。

ろがありますね。これをやる人がじょうてがやっている。つまり筆力のある人が描いているので見られる訳です。絵画構成というか、デッサン力もあるんですな。

後藤——やつぱり型でやると堅い感じになるから、フリーハンドで描くということになるんですか、ね。知恩院なんかどうでしたか。フリーハンドの方が多かったですか。川面——三門ですな。あれは自由を描いていますな。

小西——あれは時代はどの辺でしたか。後藤——あれは元和ですね。ああいうものはフリーハンドで描かないと駄目じゃないですか。元気がでないですね。川面——さきほど仰る型を使うというのは文様ですね。構造材の文様は型を使ったところがあつたかも知りませんけど。

小西——三十三間堂だったらかなり古いからどうでしょうかね。

後藤——あれは鎌倉ですし、画の出来からしてもしつかりしていますね。川面——その辺の人はフリーハンドで描いてもすばらしいものですよ。

後藤——一寸変わりますが、日吉さんの東照宮(注1)なんかも何回も塗り替えられていますね。川面——東照宮形式のところは型を使つてたやろかねえ。後藤——ただね、最初から果たして型を使つたやろかと、修理の時に見てたんでね。小西——当初のオリジナルが修理をする度に変わって行くことがあります。後藤——それは確実に変わって行きますね。御香宮などもそうです。

つていないと困ることもあつたかも知れせんね。

小西——先程、話に出ました平等院の鳳凰堂の宝相華の文様が唐草風に使われているんですが……。

川面——それ、どこ、支輪かな。後藤——垂木の裏板かな。小西——化粧裏板とか、支輪の化粧板とかでした。あれが日本へ入つて来たのは昔、大陸から渡つて来たもので、韓国とか中国へ行きますとあれに似た彩色がやたら多いんです。むしろ後世の描き方ですが、こちらは古いものが沢山あるのでどこら辺が、わが国の初めてのものではないか。

後藤——いやあ、それはむしろ奈良へ行くべきでしょう。法隆寺には日本の当初のものがあつた訳だから。川面——平等院の内陣の支輪は数が足らんということで、あれは僕がやったんですがその時に唐招提寺などへ見に行きました。その時分は小場恒吉先生が居られて、当時法隆寺の模写をやっていた頃は僕が一番若かつたので使い易かつたんでしよう。よく色々教えて頂きましたわ。

小西——小場先生は文様の権威でいらしたですからね。

川面——あの方は韓国へよう行つてらして、今の北鮮の首都の平壤の博物館などに居られたから、その辺りの文様などどう知つてはるし、ね。小西——今日は小場先生のお話が出ると思ひませんでした。日光で私はお目に掛かつて仲々洒落な小柄なおじいちゃん、で、国修(注2)へ来られる時、女物の下駄など履いていらして、「君こんな下駄履いた事ないだろう」などと仰言つていました。よく覚えてますよ。私の処の先代が色々ご教導頂いておりました、私などまだ教えて頂く処まで行つていなかった頃です。

川面——文化財の先生方はあの方に随分と困らされてらしたですわ。小西——天衣無縫という感じの方でした。一寸話がかわりますが、忍冬文というものがありません。会報の名前が「すいかずら」でして、忍冬の文様とも深い関係がある訳ですが、この忍冬唐草はギリシャ文明あたりから色々な形を経て日本の飛鳥朝に入つて来ている訳でして、随分と古

い響きがあります……。

後藤——昔あつた文化財関係者の会として「忍冬会」というのがあり、奈良の法隆寺関係から京都の方へうけついで続けてましたが、ね。

小西——確か最初はガリ版刷りの誌報として出しておられたんでしたね。川面——瓦などに残っている忍冬文が奈良にあります。清水寺の仕事をやっておりますとね。大抵その建物で一つくらいは名前のような判らん文様が来て、不思議に思ひます。地主神社にも三重塔にも今やっている阿弥陀堂にも出て来ます。ほんまにこんなもんあるかいなと言

う様なものが出来て来て、それをこの間日光での研修に持って行かせて命名して下さいと頼んだんです。そうい

う判らんような新しい文様が沢山入っているのは京都の西陣の影響があつて、織物とか染物とかの文様文化みたいなもので、その辺の関係の人が建築彩色を手掛けて、これ一寸使おうか」とか言つて新しい文様を使つたんです。平等院とか海住山寺とかの建築系統のものでない文様が清水

にはありますな。

後藤——彩色の仕事は専門的なものがないからどうしてもそういう人達に仕事を頼むんでしようかね。小西——着物の文様ですね。これは確かに西からの影響があります。錦の織物にも随分泰西的というか、そういう柄(がら)はあります。又別の見方で兵庫県の三木市に伽耶院というお寺があり、この住職さんの奥さんが先般亡くなられた山崎昭二郎先生の妹さんなんですが、縁があつてこの寺の本堂の修理に係りました。先程の手作りの話ではないんですが、非常に稚拙な文様が描いてあるんです。伽耶院の彩色は川面さんの言われた地方の方言にびつたりではないですか。私は日光から行ったウチの絵描きに話したんですが、こんな描き方をすると馬鹿にしてはいけません。これはこのお寺に関係した工人のなかで初歩的な人が描いたものだろうが、非常に力強く描いてある。その気持ちを考えて作業をしてくれと言つたんですが、ところどころ剥落している所をつなげて行くのが何だかうまくつな

がらなくとも、斜光ライトでも判らないものがあつて後世別の機械でもつと判ることがあれば、それだけのために取つて置きたいなんて考えて、あんまりいじめたくないと思つたりするんです。ですから彩色の復元についてはよっぽど考えていかなければいけないですね。

川面——知恩院の場合、壁面の普賢文殊はその上へ板を当てて板で保護して、新しい板の上へ復元彩色をやるという

ことは中が残るさかいね。後藤——特にあそこは板の間から風が入つたりして、すいてますから風化され易いこともあるし、また逆に二重に貼りますと蒸れないかという心配もあります……。

川面——それはびちつとした

いで、あいだを空けとかないかんね。

後藤——以前、小西さんに東照宮（日光）を案内して頂いた時、陽明門の壁画の牡丹の絵がありましたね。あれと似た話ですね。

小西——あれは板の下に金鶏鳥の絵が描かれているんですか……。

後藤——それを嵌め込んでいますが納まりが悪くなりませんか。

川面——柱にチリがないと困るやろね。

小西——あれは丸柱のあいだに嵌めてあるんですが、丸柱がグリ文彫りで胡粉摺りなものでかなりカモフラージュされていきますけど……。

川面——それは多少辛抱して中を残すのは大事なことですな。

小西——私はあれはむしろ思い切って板を外してしまっただけの方が良いとおもいますが……。

川面——反面、後補で作った人達の感覚というのがあるんですよしね。

後藤——まあ、タイムトネールといいますが、人間の頭がそこいら辺までバックして考えられる訳じゃないですから、

あくまで平成は平成の頭ですから、そこいらはむずかしいところですね。何しろ電気も何も無い時代の事ですから、今はもう物があふれ余っている時代になってるし、それだけに何でも出来るといったことになりませんか。

小西——その電気のない時代の光のルックスの問題なども大切な事ですね。

後藤——特に考えませんがね。やはり明るくしてしまおうと面白さが無いけど、自然光で見ると襖絵などは立体感を受けるもんですね。今は明るい所で絵を描きますからどうしても見てのそのものではない、違ってくると思います。

小西——京都には特に素晴らしい襖絵が各所にありますが、昔あれが障子の明かりとか、戸を開ければ自然光が入りますし、昼間は何でもありませんし、夜、蝋燭とか灯心の明かりで金を使っているもそんなに強くないですが、電気之光を当てて金が浮き出す様になると変わった印象を与えますよな。

後藤——以前滋賀県に居った時に、小川さんという写真家が襖絵を撮っていたんですが、

モノクロでどうやって撮るのかなと見てたんですよ。そうすると、服装は真っ黒なものを着ましてね、電光がこちらから漏れないようにして、カメラの前をぐるぐる歩くんですよ。ああいう撮り方をするのと陰がなく自然光に近い良い写真ができますね。

小西——カメラを長時間露出をかけて、そういう事をやる訳ですか。自分がフィルターみたいな事をやっているんですか（笑）。なるほどねえ。

後藤——そういう撮り方をすると、それが眼で見た感覚のものに写るんですよ。

川面——文化財を撮りはるいうのは、よく絞って三十分程開けとかはるのをよくやってはったわねえ。斗拱の暗い所などをね。

後藤——ただ、文化財の写真撮るとどうも硬い感じがするんですよ、絞りすぎですね。ですから感度（ASA）が五十位の時は大変でした。でも写真に味わいがあつた。手間暇かけるという事から推してもそうだったんでしようが。

小西——襖絵という装潢師の仕事になりますし、よく判らない点が出て来ますが、川

面さんにお聴きしたいんですが障壁画で岩絵具を使っているのは時代的にどの辺位からですか。二条城の仕事などやっておられる訳ですから、どうでしょう。

川面——古いと言えば法隆寺の壁画なども岩絵具を使っていますよ。

小西——そうすると、かなり古い時代からになりますか、一寸ここでは地方の彩色の根源の問題に触れてみたいと思います。京都府の在所とか滋賀県や奈良県、大阪府のはづれの方とかにあるかと思えますが所謂染料の絵の具ですね。藍棒とか雌黄とか臘脂とかで色を作り塗って行くやり方ですね。高価な岩絵具が使えないので代わりにそういう方法で彩色をするやり方があつた筈です。ただ階級的には使わなかつたとか使えなかつたという問題は判りませんが、岩絵具の代わりに草緑（くさみどり）を緑青に見立てたり、藍に少し墨を落として群青にしたりということがあつたとおもいますが……。

川面——人工群青というのが平等院の扉絵の絵具から見出されました。海のところがつている。普通、木口塗と言っている。逆さまにやっている訳です。そういう所もあるんでしようね。

川面——その方言やね。その言葉というか、その色やね。

小西——何でこんなこととしてあるんだろうと思うことがありますね。

川面——前は何となくそういうものを軽蔑してたこともありますが、この頃では尊重せなあかんね（笑）。

黄色で線描きだけが残っていて、黄色の海なぞ無いということ、藍を上から塗ったか。その藍だけがとんでしまつて黄土だけが残ったか、又その黄土を藍で染めて人工群青をこしらえたか。

後藤——それはいつの頃のものですか。

川面——平等院を建てた時の事でしょう。高いものに対して又安いもので補うということとはあつたのでしよう。

後藤——藤原一族が建てた鳳凰堂でも人工絵具を使っていたということですか。

川面——仏さんの頭の螺髪（らほつ）、あれなんかはちゃんと天然群青を使うてはる。それで扉の絵の海なんかは人工のものですな。知恩院なんかでも浅い色のは使つてはるみたいですよ。

後藤——岩絵具は高いからと言われたがその当時の日本では使つたと言います。あれだけ仰山（ぎょうざん）絵を描

いたと思います。

小西——まだまだお話を伺いたい事が山ほどございますが、紙面の都合もあり機会を見てといたしたいと存じます。色々興味あるお話を聞かせて頂き有り難うございました。

（注1）滋賀県大津市にある重要文化財東照宮で日吉大社の末社（寛永十一年造営）。

（注2）現在の勸日光社寺文化財保存会は昭和三十年代は日光二社一寺国宝修理事務所だったので「国修」は略称。

（この項、終）

かんならんからね。

小西——緑青は孔雀石からでした。

川面——いや、その亀の甲の化学式がちょっと違うだけなんですわ。

後藤——今はそういった絵の具は殆ど外国から入るんですよ。南米とか又他の……。

川面——この間から絵の具の世界分布の話が出ていたの、石田放光堂さんに話して地図を描いて貰おうとしたんですわ。そして今は産地から全部アメリカへ集めて、それを世界各地へくばるルートしかない。つまり、日本の商社なりが現地直接、産品を仕入れることはないという話ですね。アメリカへ集中しているもんを間接的に仕入れる方法なんだそうですわ。

後藤——それは産まれた所も判らないというんですか。

川面——アメリカへ聞けば判るでしょうな。

後藤——私は確かめるため、ある店で聞いたら、アフリカのケープタウンあたりで採れるというてましたな。

川面——ケープタウンの辺はダイヤモンドとか宝石がま

ありますな。あそこでもそういった石が採れますわ、それを世界中からアメリカへ集めて、資金力というのですかな。シンジケートみたいな所を集めよる、それを各国の商社を通じてくばるんですよ。

後藤——ああいうものはいろんな用途があるでしょうからね。

小西——宝石類以外でも貴石とか、大きな塊のまま使う方法がありますね。

川面——顔料として使うのは知れてんのとちがいますか。

後藤——昔の顔料の使い方をたどって行くと、やはり奈良京都の建物を中心に考えないかんでしょうね。

川面——それ、その中心のものと地方の物とは材料や使い方では違いがありますな。

後藤——さっき川面さんが言われた地方色の仕事というのはどういう風に組み込んでますか。まず、顔料から探すべきか。京都流じゃない様な変え方をしようとする……。

川面——それら顔料を分析せな

後藤——いわゆる僻地の方へ行って修理をするとなると、

昔はそんなにいい顔料など使ってなかつたかも知れんし、ほかが一番怖いと思うのはそんな場合常識的に考えて一定のものにしてしまおうということなんですわ。

川面——ちつとずつ分析すると高うつくけどね、やはり分析して何かといることを掴んでからでなくては出来ません。

小西——それは私のところでも同じことです。自分達は専門職かも知れないが絵の具の材質までは見分けられませんが、絵の具屋に見せてこれはどういう物だということが判らなければ分析するしかありませんから。ずばりでなくても近い線まで出して貰わなければ使えません。

後藤——ただお二方ともね、腕が良いもんだから、修理が良くなり過ぎはせんかと思うんですがね（笑）。危険性というのはないですかね。

小西——それは思い込みというの怖いでしようね。

後藤——この間びっくりしたのはね。斗面のところを白く塗っていて、斗線のところを赤く塗っているんですよ。それを平気で何とも思わんでや

お詫びとご案内

京都市の石田放光堂さんに「胡粉について」という題で大変貴重な原稿を川面稜一さんを通して頂いたのですが、今回は増頁し何とか掲載を考えたのですが、出来ませんでしたので、次号に載せさせていただきます。

右お詫びかたがたご案内いたします。

「社寺建造物美術協議会」名簿

(五十音順)

平成8年4月

法人名(個人名)	代表者名	住 所	TEL・FAX番号
1 (株)大谷相模煉造所	大谷 秀一	〒537 大阪府大阪市東成区東今里2-6-20	TEL. 06-971-6571 FAX. 06-971-6511
2 (有)川面美術研究所	川面 稜一	〒616 京都府京都市右京区鳴滝本町69-2	TEL. 075-464-0725 FAX. 075-464-0099
3 岸野美術漆工業(株)	岸野 勲	〒321-14 栃木県日光市御幸町587	TEL. 0288-54-0072 FAX. 0288-53-3366
4 (株)金 寿 堂	黄地 耕造	〒527-01 滋賀県愛知郡湖東町大字長273	TEL. 0749-45-0003 FAX. 0749-45-0505
5 (株)小西美術工芸社	原 登	〒108 東京都港区高輪1-5-22 〒321-14 栃木県日光市山内2365	TEL. 03-3447-1481 FAX. 03-3447-0736 TEL. 0288-54-1198
6 (有)齋藤漆工芸	齋藤敏彦	〒270-14 千葉県印旛郡白井町大山口1-19-2	TEL. 0474-91-8712 FAX. 0474-91-9046
7 (株)さ か い	酒井 清	〒520-23 滋賀県野州郡野州町小篠原7-1	TEL. 0775-87-1178 FAX. 0775-87-5355
8 (有)さわの道玄	澤野道玄	〒615 京都府京都市西京区上桂宮ノ後町73-2	TEL. 075-391-6673 FAX. 075-391-9951
9 (有)鈴木鋳金具工芸社	鈴木重信	〒321-14 栃木県日光市東和町62	TEL. 0288-53-1121 FAX. 0288-54-3263
10 (株)青 銅 社	稲見 晃	〒933 富山県高岡市赤祖父94-1	TEL. 0766-25-1139 FAX. 0766-25-5231
11 田 村 漆 工(有)	田村 貫一	〒421-12 静岡県静岡市羽鳥731-4	TEL. 054-278-8767 FAX. 054-277-0988
12 平尾 総本 舗	平尾 伝治	〒604 京都府京都市中京区御幸町二条上ル	TEL. 075-231-2580
13 (株)ブ シ	安達 譲治	〒171 東京都豊島区高田1-36-22	TEL. 03-3988-3471 FAX. 03-3980-3291
14 (株)北陸銅器製作所	米田 昭	〒933 富山県高岡市赤祖父548	TEL. 0766-25-5800 FAX. 0766-25-2497
15 (株)細川社寺巧藝社	細川夫美子	〒933 兵庫県神戸市西区井吹台東町1-5-13-301	TEL. 078-997-7178 FAX. 078-997-7179

◎編集後記◎

秋の創刊から春の第二号へと時の移ろいの疾さにとまどい、会報の紙面づくりもままならず、遅れた枚の便りもやつとという四月上旬のうしろ、文建協の前理事をつとめられた西条孝之様が忽然と他界さ

れ、葬送の場から帰る車中いろいろ去来するものがあった。先生が担当された東京大学赤門の現場で初めてお会いしてからの、四十年近い星霜が流れていく。編集子と事務局長とよく現場へ伺い、さまざま教えて頂いた。夜暗い本郷通りを歩きながら、あれはこう

だ、これはあ、だと尽きない話をした記憶がある。その後、文化財の修理部門は大きく変貌を遂げ、都道府県に文化財担当部課が出来、文建協の設立などさきの大戦の後、残されてきた未修復・未修理の文化財は次々と着工されていった。先生は奈良県へ出向され、

春日大社式年造替でお世話になった。本庁に戻られたり、文建協でも精力的に献身された先生。この協議会が平成二年秋に発会した頃「本当によかったなあ」と言って頂けた多くの先輩・先輩の一人であつた。謹んで協議会の皆さまと編集子・事務局長とともに、

西条先生の御冥福をお祈りいたします。
(西)



材料店紹介

(株)喜屋 (東京・湯島)

彩色特集にちなみ日本画材料店「喜屋」さんをお訪ねし、岩絵具についてお話をうかがいました。

岩絵具には天然岩絵具、新岩絵具、合成岩絵具がありますが、その中の天然岩絵具は松下社長が自らお作りになっています。

原石探してから粉碎、濾過を繰り返して細末に行きますが、その重労働を「楽しみながらやるから苦労はない。」とおっしゃいます。

微妙な分子の大小が色の濃淡を決めるのですから、特徴である上品な色合いは、松下社長の永年の経験と研究

に培われた「技」から生まれるのでしょう。

「いい石を見つけ、少しでも多く、いい色の絵具を提供したい。」と言うお気持ちには、質の悪いものは何度でもやり直し、気に入ったものしか作らないとの信念と気概にあふれ、圧倒された次第です。

〒113 文京区湯島三ー四四ー八
TEL 〇三ー三三三ー八六八八
FAX 〇三ー三三三ー三五八七
※月曜定休
(午前九時半〜午後六時半)

